首輪付きが学園入り

D.L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
首輪付きが学園入り

【Ｎコード】
Ｎ４０３１Ｙ

【作者名】
Ｄ．Ｌ

【あらすじ】
ビッグ・ボックスでＯＲＣＡ旅団のメルツェル＆ヴァオーの２人と戦い
相打ちになり、死んだらトリップというわけのわからないものですが、
よろしくお願いします。

注意！初心者なのでほんとに駄文に思いますが、温かい目で見てもらうとうれしいです。

注意書き

初めましてD・Lといいます。

初投稿ですので、ものすごい駄文になると思います。　むしろならないといろいろおかしいです。

あと初心者でもあるので、書き方なども教えてくれるとうれしいです。

自己満足のために書いたのでつまらないと思います。

読む方は1度深く考えた後に「ハラショー！」と叫び倒した後にもう一度深く考えてから読んでください。

それでも、読んでくださったら本当にありがたいです。すごいうれしいです。

拝んで崇拝したくなります。

注意書き（後書き）

これからもよろしくお願いします。

D．L

第1話（前書き）

どうも　D．Lです。
おもしろくないと思いますが、よろしくお願いします。

第1話

作戦領域ビッグ・ボックス

メ「ＯＲＣＡ旅団メルツェルだ。」

メ「ビッグ・ボックスへようこそ。　歓迎しよう盛大にな！」

ウ「レイテルパラッシュ　ウィン・Ｄ・ファンションだ
　一気に敵ネクストを叩く　遅れるなよ。」

首「了解」

ウィン・Ｄがガチタンと戦っていると

ウ「…火力だけか　それでＯＲＣＡとは、笑わｓ」ヴァ「ハッハァー」ウ「…すまない…撤退する」

（……え……なにそれ……）

ヴァ「ハッハー！
　まだまだいけるぜ、メルツェェェェェル！！」

ガチｔ…スピーカーが両背中と左腕のガトリングで、苛めてくる。
メルツェル？はライフルと大型ミサイルを使い分けて、苛めてくる。

（ちょ！　待っ！）　　ＡＰ７０％減少

メ「用済みとなって、尚尽くすか。」

（……イラッ）

メ「憐れな駒だ。」

（……イラッイラッ）

メ「すべて終わっているのだよ…。」

プッツン

首「コロス」

右腕のＭＲ－Ｒ１０２（アサルトライフル）と左腕の－０３－ＭＯＴＯＲＣＯＢＲＡ（シンガン）で
スピーカーに八つ当たりをして、

ヴァ「へっ、ここまでか…　悔いはねぇ…　楽しかったぜ…メルツェル…！！」

ボコす

メ「…単純馬鹿が、死んで治るものでもあるまい…」

メルツェルは両手のライフルを使い、
首輪付きは左背中のＫＡＭＡＬ（スラッグガン）と右腕のＭＲ－Ｒ１０２（アサルトライフル）を使って戦い、

メ「（ブッ、グフッ）…潮時か　まあいい　最早私も無用だ　人類に黄金の時代を。」

首「あ～俺ももう無理死ぬわ…」

（…すいません…セレンさん…）

第2話（前書き）

１００％駄文です。

戦闘とかマジ無理です。　ごめんなさい

第2話

職員室

―千冬ｓｉｄｅ―

はぁ……

「なぜ…一夏がＩＳに反応している。」

これからめんどくさくなるな。

「山田先生、政府の対応は？」

「世界初の男性ＩＳ操縦者で日本人なのでＩＳ学園へ入学させるらしいです。」

「やはりそうなｒ―〈ズドォォォォォォォォォン〉なんだ次から次に」

「アリーナに上空から何か落ちてきたそうです。」

「はぁ　行くぞ山田先生。」

「わ、私もですか！」

「当たり前だ、行くぞ。」

「はいっ」

アリーナ内

「なんでしょうか？」

あれは……

「人だ、怪我をしている保健室に運ぼう。　近くに何かあったらそれも回収だ。」

「尋問は、後だ。　・・ん、なんだ？」

千冬が男のそばにあるドッグタグを見つけ、

「ＩＳだと！　なぜこいつが持っている。」

ＩＳを見つけ回収する。

ふたりは、男を保健室に連れて行き、そのあと一人でそのＩＳを調

べた。

ＩＳ学園保健室

―首輪付きｓｉｄｅ―

（知らない天井だ。）

（ここはどこだ、地獄じゃないのか、天国なのか。
ハッまさかアスピナの施設！　いや違うな俺、メルツェル？と相打ちにあって死んだし、
んじゃあここはどこだ？）

ガラッ

威圧感がやばい女性と、メガネのサイズが合ってないような女性が入ってくる。

「起きたか、　悪いがこちらの質問に答えてもらう。」

「わかった、かわりにこちらの質問にも答えてもらう。」

「わかった、まず最初に聞くおまえは誰だ。あとなぜＩＳを持っていた。」

「リンクスだ。　独立傭兵の、名前はない。　周りからは首輪付きとかリンクスとか呼ばれてた。
　カラードランクＮｏ，６　そこそこ有名だったはずだ。　ＩＳなんてものは、知らん。初耳だ。」

「知らんな。　リンクスとはなんだ。カラードもだ。　ＩＳを知らんだと。」

威圧感が半端ない女性睨まれる。

「リンクスは、人型起動兵器アーマードコア・ネクストに乗ることができる人のことだ。
　カラードは、傭兵やリンクスを管理機構のことだ。　まじで知らんの？」（目が怖いよぅ……）

「ああ、そんなものまったく聞いたことがない。」

「まじかよ。なんなんだよこれ。イジメか？新手のイジメなのか？」

「知らん。とりあいずおまえらは傭兵か？」

「一応」

「あと何の目的であそこに来た。」

「俺は企業連の依頼で、ＯＲＣＡ旅団の本隊を撃破しにビッグ・ボックスに行って、メルツェルかなん　かと相打ちして死んだと思って気絶したらここにいたんだよ。んでこちらからも聞きたいことがある。」

「まずここはどこだ。天国か地獄か、それともアスピナの実験施設か？」

「ＯＲＣＡかなんかは知らんが、ここは天国などではない。　日本のＩＳ学園だ。」

「あれ？日本って極東の日本だよなぁ？」

「ああ」

「国家って前の国家解体戦争で解体されてなかったっけ？」

「何言ってるんだ。」

「え？　あれ？　間違ってたっけ？」

「現にここは、日本だ。」

「う～ん　まぁいいや　　んでＩＳってなんだ？後、ＩＳ学園も。」

「ＩＳは正式名称インフィニットストラトス
宇宙での活動を想定されたマルチフォーム・スーツだ。」

「なにそれ？　聞いたことない。」

「はぁ…話が全く噛み合ってないな。」

「んじゃあこちらで起きたことを一通り話させてもらう。」

俺は、ＡＣ、ネクスト、ノーマル、ＭＴ、国家解体戦争、リンクス戦争、企業連、ＯＲＣＡのことや
国家解体戦争で国家が崩壊し、かわりに企業が世界を統治していることと世界はコジマ粒子という
汚染物質で汚染されていて人類の過半は清浄な高度７０００ｍの高空にあるクレイドルいう居住用巨大
航空機に移住していることなどを話した。
相手側は、そのことについて全く知らずむしろ戦争はどれも起きていなく、ＡＣなどについては、開発すらされておらず、コジマ粒子も存在していないと言う。

そして相手側は、ＩＳについて話し女性しか乗れなくて女尊男卑になっているけど先日、
初の男性操縦者を発見したこと、ＩＳについては、軍事利用などをアラスカ条約で禁止されていることを話した。
もちろん俺は、ＩＳなんて知らないし、アラスカ条約なんて初耳だと話した。

「とりあえず、お前はここに監禁させてもらう。明日また来る。
今日は、ゆっくり休め。」

そう言って、二人の女性（片方確実に空気だった）は部屋を出て行った。

（おいおいおいおいおい、ほとんど初耳だぞ。なんだよＩＳとか、女尊男卑？んなもんなになった日な　んてねぇよ。）

（はぁ……もうやだ。疲れた。　死んだと思ったら、変なところ来てるし。）

（なんだよ、ここまさかの別世界とでもいうのか？……そうかも……）

（もう無理寝る。）ｚｚｚｚｚｚｚ

ＩＳ学園廊下

―千冬ｓｉｄｅ―

「なんなんですか？あの人、言ってることが分かんなかったんですけど……」

「いや　その前に厄介なことが二つある。」

「？　なんですか。」

「まずあいつには、ＩＳ適性がある、しかもＡ＋だ。」

「ほ、ほんとですか！」

「あとあいつが倒れている近くにドッグタグがあったんだがＩＳだった。
しかも解析がほとんどできなかった。
分かったのは、そのＩＳが未確認のコアが搭載されてたくらいだ。
」

「う、嘘でしょう！　何でですか？」

「さすがに私でもわからん。」

「はぁ何でこんなに問題が山積みになるんだ。一夏といい、あの男といい。」

「あの人いったいどこの人なんでしょう。未確認のコアを搭載されてるＩＳを持っていたり、変なこと言い出したり。」

「あくまで私の推測の一つなのだが、山田先生は、並行世界や別世界などを信じるか。」

「あの世界はたくさん分岐しているってやつですか。」

「ああ、で私はあいつがその並行世界から来ているとかんがえているのだが。」

「つまり、あの人が、並行世界から跳んで来たとでもいうのですか。ＳＦ作品じゃあるまいし。」

「あくまで可能性の一つだ。私だってできるのならば、そんなことかんがえたくないが・・・
とりあえず今夜は、徹夜でいろいろ調べるぞ、山田先生。」

「えぇ！ほんとですか！」

ＩＳ学園保健室

―首輪付きｓｉｄｅ―

「う‥うぅぅぅ……なんでア、アンサラ―に、ソルディオスがいっぱい……」ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ

こんな感じ？（アンサラ―・ソルディオスオービット付き）

＞ｉ３４７０５―４３９０＜

第2話（後書き）

駄文です。ほんとごめんなさい。
たぶん来週あたりから投稿がすごい遅くなります。すみません。

第3話（前書き）

第3話投稿させてもらいます。
いくつかのコメントありがとうございました。
うれしすぎて逆流しそうになりました、
でも抑えてハラショー！を連呼させてもらいました。
これからもよろしくお願いします。

第3話

ー首輪付きｓｉｄｅー

ＩＳ学園保健室

ガラッ

昨日の二人の威圧感がすごい方が入ってきて、

「お前の処置が、決まった。」

「んで、どうなったんですか。」

「お前は、この学園に入ってもらう。拒否は無理だからな。」

「まぁ行くあてないからいいですけど。　んで俺は何をすればいいんですか。

用務員ですか？それともなんかの管理とかですか？」

「いや、お前はこの学園の生徒として入ってもらう。」

「へっ？　ほんとですか？冗談ですよね？
この学園ってＩＳ操縦者を育てるためですよね？」

「ああ」

「んじゃあ　乗れないじゃないですか？　俺、男ですよ。
昨日言ってた男性操縦者じゃないんですし。あとＩＳについてなんも知らないですし。」

「それについては大丈夫だ。
調べさせてもらったが、お前には、ＩＳの適性がある。しかもＩＳも所持していた。」

「まじですかい。」

「そういうことだからお前には、〈ドスン〉　これを読んでもらう。
」

「なんですか、この殺傷能力高めでものすごい分厚い本。」

「お前にはこれを１週間で覚えてもらう。いいな」

「え？こんなに！無理だ！覚えきれねえ！」

「覚えろ」

「ハッ！了解いたしました。！」

「ここはありとあらゆる国家、企業、法律の干渉を受けない。もう有名無実化しているがな。
まぁ　ここにいればある程度は、大丈夫だろう。」

女性はケースから、『ストレイド』と書かれている。ドッグタグを出した。

「これがＩＳだ。」

「これ？　これって俺が持ってたやつじゃないですか。無かったと思ったらってこれですか！
何でこれが、ＩＳに！？　え？どういうこと。ナニカサレタの俺。」

「知らん　お前が来た時に、近くに落ちていて拾ったらＩＳだったんだ。」

「まぁ　なんでかほとんど解析できなかったがな。」

「っていうかＩＳってこんなんなんですか？」

「待機状態だからだ。専用機などは、アクセサリーなどになる。」

「んじゃぁ俺はＩＳ学園に通う訳だな。
んで俺は、どこで生活すればいい？あと俺の名前はどうする。」

「そうだな、ここは全寮制だ。一人部屋でも用意しておく。名前については、適当に考えとけ。」

「わかりました。
そういや、あんたと昨日のメガネの人の名前知らんかったな。」

「織斑千冬だ。お前の教師になる。もう一人は、山田麻耶だ。副担任だ。」

「そういやぁ　昨日少し考えたんだが、俺並行世界やらなんやらから来たんかもしれん。
信じたくないが。」

「私達もそういう仮説も考えたんだが。」

「まっ、信じられるような話じゃないからな。」

「そうだな。」

「んじゃぁ俺はこれを覚えますよ。」

「分かった、それではな。」

ガラッ

織斑千冬は出ていき保健室に一人になった。

「んあぁ　よし！覚えるか！……もう……無理だぁ。」

「はぁ　んでこれってホントにＩＳなんかなぁ？」

ＩＳ（ドッグタグ）を首にかけ

「何これ。前にいっぱい出てきた！」

いくつかのウィンドウが出てきて

「あぁっ！　何でネクストの装備がいっぱい書いてある！？」

「どういうこと、まさかこれが俺のＩＳなのか？」

機体の情報を見て、

「そういやコジマやばくね……って無害ぃぃぃぃ！　あのコジマが無害だと！」

「やばっやばっ　なにこれ夢？夢なら覚めてぇー」

「しかもなんかカラードとＯＲＣＡのメンバーの機体が全部あるし、操縦者の名前もあるし」

「あっ俺が切れてボコしたやつヴァオーって言うんだぁ。エンブレムカブトムシかぁ」（現実逃避中）

「ん？パッケージって何」

分厚い本を見て

「追加武装的なモンか。」

「おっ！俺のやついくつか最初からパッケージあるじゃん　ってアームズフォートォォォォ！」

「やばいやばい、スピリット・オブ・マザーウィルとかあるし、アンサラーも！？」

「うわーなにこのキチガイ、バグってんじゃね。」

「もういやだ、本読む。」

あきらめて本読みだした。

「あ〝あ〝ぁ　こっちも無理ぃ、覚えれるかよこんなの。」

「名前どうしよ？」

首輪付きは、分厚い本をときどき現実逃避しながら読んだ。

第3話（後書き）

今回も、読んでもらってありがとうございます。

来週あたりからテストがあるので更新遅れます。

1日一作が、3，4日で1作になると思います。

ほんとすいません。

第４話（前書き）

第４話投稿です。

やっぱり駄文です。

これからもよろしくお願いします。

第４話

ＩＳ学園保健室

－首輪付きｓｉｄｅ－

さっき織斑先生（織斑さんとか千冬先生と読んだら出席簿で殴られまくった）が来て、
「今日は特に何もないが、ここからは出るなよ。」と言われたので名前を決めようと思う。
別にあの分厚い本を読みたくないとかそういう訳じゃナイヨ。

（名前どうしよう、ほんとに）

（そのまま首輪付きは、駄目だよなぁ
リンクスも無理があるし。）

（頸（くび）　和月（わつき）とか！）

（いや……なんかいやだ）

（う～～ん　どうしよ？ほんとに）

（アスピナ・Ａ・トーラスとか〔ＡはアクアビットのＡ〕変態のところは名前にしたくないな。うん）

（ウルナ・クラニアムはどうだ！・・・・たしかラテン語で意味が尺骨と頭蓋骨だった気が・・やめよう）

（どーしよどーしよほんとにどーしよ。）

（うーーんレイヴンはどうだっ！　・・・そこそこいいな候補に入れよう。）

（どうしよう。う～ん）

ガラッ

「誰ですかぁ？」

「私だ。」

「織斑先生ですか。どうしたんです。ここに何か用でも？」

「いや、とくにはないが。」

「そーですか。　んで今、名前決めてるんですけど候補聞きます？」

「聞かせてもらう。　どういうのが出たんだ？」

「まず、そのままで首輪付き」

「却下だ。」

「何でですか。　どこがダメなんですか！」

「全部だ。　まず名前ですらないじゃないか。」

「まぁ、そうですけど。」

「で次はなんだ。」

「あれ？気になるんですか？」

「最初からそれだとろくでもないのばかりな気がしてな。」

「さすがにそれはないですよ。
自分の名前くらいちゃんと考えますよ。……
……たぶん……」

「はぁ、で次はなんだ。」

「次は・・・頸　和月で「駄目だ。」これもだめですか？」

「当たり前だ。　さっきと同じじゃないか。」

「少し違いますよ。今回は、苗字が、頸　名前が、和月ですよ。発音も違いますし。」

「それでもだ。」

「うぅぅ　次はアスピナ・A・トーラスです。」

「まぁ　それは何とかなるんじゃないか。」

「そしてAは、アクアビットで由来は俺のところの壊滅した企業で、ものすごい変態な企業です。
トーラスは、そのアクアビットの技術者を取り入れた企業です。こちらも変態な企業です。」

「それを言わなければ前よりはマシだったんだが、それを聞いて思ったよ、駄目だ。」

「まぁこれはもとよりするつもりありませんでしたから。

で次はウルナ・クラニアムはどうですか？」

「駄目だ。知っているぞ、それの意味くらいは。」

「じゃ、じゃあラストで、レイヴンはどうですか。これはさすがにいいですよね！」

「また名前じゃあないが、もうそれでいい。それで……。」

「分かりましたー。んじゃあこれから自分のことはレイヴンと名乗りますね。」

「ああ。」

「では改めまして、よろしくお願いします。織斑先生。」

「ああ、わかった。であれはもう覚えたか、レイヴン。」

「あの分厚いのですか？」

「そうだ。」

「あ、あのまだ6割ほどしか。」

「今日中に覚えろ。いいな。」

「了解いたしました、織斑先生！」

「じゃあ、それではな。」

「はい」

ガラッ

「うぅぅぅぅぅぅぅ
これ今日中に覚えるとか無理だよぅ。」

「……はぁ、まっがんばりますか！」パラパラ

レイヴンは時折、現実逃避をしたり悶えたりしながら分厚い本を読んでいった。

（……もう……ゴール……しても……いいよね……）

第４話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
これからも頑張らせてもらうのでよろしくお願いします。
次回は、たぶん紹介に入ると思います。

主人公紹介＋機体説明（前書き）

投稿です。
次からたぶん原作です。

別にこれは読まなくてもいいです。
ほとんど適当に書いたことなので。
あと駄文です。
これからも駄文のままだと思いますが、よろしくお願いします。

主人公紹介＋機体説明

名前　首輪付き⇒レイヴン

年齢　１８歳

趣味　読書

好き　ストレイド　寝ること

嫌い　アスピナ、トーラス、アクアビットの技術者達
夢に出てきたソルディオス・アンサラー

ＡＣＦａの企業連ルートのビッグ・ボックス戦でメルツェルと相打ちになって死亡という設定になっています。
ちなみにウィン・Ｄ・ファンションがヴァオーに瞬殺されたのは、ヴァオーのガトリングとバズーカがうまいこと当たったからです。
首輪付きのカラードランクはＮｏ．６ということになっていましたが、強さ的にはものすごい頑張ってぎりぎりＮｏ．２のウィン・Ｄ・ファンション勝てるか勝てないか、というくらいです。

機体説明

ＩＳ　ストレイド

中にＡＣＦａの装備が全部入っているというキチガイ仕様で

す。

コジマはもちろん無害です。

シールドエネルギーはＡＰをものすごく少なくした感じで、普通のエネルギーはコジマの力で回復していきます。

ビッグ・ボックス戦＋今の機体アセン

Ｒ　ＡＲＭＵＮＩＴ　：ＭＲ－Ｒ１０２

Ｌ　ＡＲＭＵＮＩＴ　：０３－ＭＯＴＯＲＫＯＢＲＡ

Ｒ　ＢＡＣＫＵＮＩＴ　：ＤＥＡＲＢＯＲＮ　０２

Ｌ　ＢＡＣＫＵＮＩＴ　：ＫＡＭＡＬ

ＳＨＯＵＬＤＥＲＵＮＩＮＴ　：ＮＯＤＡＴＡ

Ｒ　ＨＡＮＧＥＲＵＮＩＴ　：ＮＯＤＡＴＡ

Ｌ　ＨＡＮＧＥＲＵＮＩＴ　：ＮＯＤＡＴＡ

ＨＥＡＤ　：Ｈ１１－ＬＡＴＯＮＡ

ＣＯＲＥ　：ＳＯＬＵＨ－ＣＯＲＥ

ＡＲＭＳ　：ＡＭ－ＬＡＨＩＲＥ

LEGS：03－AALIYAH／L

FCS：FS－HOGIRE

GENERATOR：GN－JUDITH

MAINBOOSTER：CB－RACHEL

BACKBOOSTER：BB11－LATONA

SIDEBOOSTER：AB－HOROFERNES

OVERREDBOOSTER：I－RIGEL／AO

STABILIZER

HEADTOP：HD－LANCHEL－OP

T01

HEAD RSIDE：GAN01－SS－HSS0

ARMS R：GAN01－SS－AS0

ARMS L：GAN01－SS－AS0

LEGS RMIDDLE：GAN01－SS－LMS0

というアセンになっています。

あとこのアセンは弱いと思います。理由は、ほとんど適当に作ったからです。
色はメインを真っ黒にしてところどころにくすんだ赤をつけるだけです。
次はパッケージについてです。パッケージは、ＡＦにします。
一応すこし説明します。

まずギガベースです。これはたぶん本編に出します。
大きさもあまり大きすぎず長距離砲撃もできて、水陸両用だからです。

次にランドクラブ、これはたぶん出しません。
理由は特徴が足が多いくらいです。長距離砲撃もギガベースみたいなのがＡＣＦａにもありませんでしたし。
でもソルディオス・オービットは出します。
あの変態企業が作ったあれは出したいです。

次はスティグロです。こいつは１００パーセント出しません。
なぜならＩＳへの攻撃方法がミサイルのみになるからです。
大型レーザーブレードは、絶対当たりませんし、海上での高機動も相手がずっと浮遊していすので意味ありませんし、まず海上戦は今のところ福音戦しかないからです。

グレートウォールは、出したいけれどあの列車みたいのを走らせる場所がないと思うので出さないと思います。でも場所を思いついたら出すつもりです。

個人的にあの大量ミサイルとガトリンググレネード砲は好きなので。

イクリプスは出したいです。飛んでいるし武装がハイレーザーとミサイルで使えそうなので。
でも一夏特訓のときくらいにしか出しません。あの便座もどきは、すごい脆いので。

カブラカンも出したいです。気に入ってるんであのかっこいい形。ミサイルを壊したら何もできないと思わせといてのあの自律兵器の大群。すごいかっこよくないですか？

ジェットは、出さないと思います。出す場面が思いつかないので。

スピリット・オブ・マザーウィルは出したいけど、
あのでかいのを出すほど広い場所ってありましたか？

アンサラ―は出します。一応ＡＣＦａのラスボス的存在なんで、
（とっつきで１発だったけど）
ミサイルもたくさんあってレーザーや近づいてきたときのアサルトアーマーなど脆いけど武装は、ちゃんとしているので。

これで今のところの説明はたぶん終わりです。これからも増えていくと思います。

主人公紹介＋機体説明（後書き）

最後まで読んでもらってありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

第5話（前書き）

今回から、原作入ります。
これからも駄文になると思いますが、よろしくお願いします。

第5話

ＩＳ学園一年一組教室

―レイヴンｓｉｄｅ―

「全員揃ってますねー。それじゃあＳ　Ｈ　Ｒ（ショートホームルーム）はじめますよー」

「それでは皆さん、一年間よろしくおねがいしますね」

「・・・・・・・・・・・・・」

（うわーなにあれ無言かよ、かわいそすぎるだろ。　まぁ俺もだけど。）

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

（しかも前の男子、織斑一夏だっけ？あれひでぇだろ。最前列のど真ん中なんて、周りの注目集めすぎてるし、そして俺は、一番後ろの窓際だ。近くのしか見てこないから楽だぜ。織斑一夏君、ご愁傷様
　そして俺は、徹夜であの本覚えたから眠いんだぜ！というわけで寝るｚｚｚｚｚｚ）

―一夏ｓｉｄｅ―

（これは……想像以上にきつい……）

なぜなら俺ともう一人以外全員女子だからだ。
もう一人は、たぶん後ろの方だと思うが、

（なんで俺は、真ん中&最前列なんだ。めちゃくちゃ目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか
いいなぁもう一人の方は、後ろで……）

はぁと小さくため息をつき、ちらりと窓際の方に目をやる。

「・・・・・・・・・・」

助けを求めて見たら薄情なことに窓の方へふいっと顔をそらした。

（なんてやつだ。もしかしたら嫌われているのか？）

「……くん。織斑一夏くんっ」

（ほんとに嫌われているのかなぁ。嫌われるようなことをした記憶はなかったはず。
６年ぶりに再会したのに……）

「お！り！む！ら！くんっ！織斑一夏くんっ！」

「はっはいっ！？」

声が裏返ってしまった。案の定笑い声が聞こえてきた。恥ずかしい。ともかくクラスは、俺ともう一人の２人。他の生徒二十九名。副担任も女性。担任は女性らしい、まだ来ていないからだそうだ。なにしてんだろうね。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？
ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに、謝らなくても……っていうか自己紹介しますか、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

そして俺は、しっかりと立って、後ろを振り向く。

（うっ　きついっ　　しかももう一人の男子？は寝てるし。）

一気に視線が集まり、全員（－1）がこっちを見てくる、あの見捨ててきた薄情な筞でさえ、横目で見てくる。

「えー……えっと織斑一夏です。よろしくお願いします。」

儀礼的に頭を下げて、頭を上げる――――ってなんだよ。その『もっといろいろ喋ってよ』的な視線は。

そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空気はなんなんだ。

（喋ることなんてそんなにないんだぞ。そして）

「……」

だらだらと背中に流れる汗を感じる。

（どうすればいい、そして何を言えばいい）

「……」

（いかん、マズイ。ここで黙っていたままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまう。）

俺は呼吸を一度やめ、そして再度吸い、思い切って口にした。

「以上です。」

がたたっ

―レイヴンｓｉｄｅ―

がたたっ

（ん……なんだ？　まぁいいや。ｚｚｚｚｚｚ）

「あ、、あのー」

パアンッ！

「いっ――――――――！？」

「げぇっ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち一年生を進級するまでに使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことにははいかＹＥＳで答えろ。逆らってもいいが、言うことは聞け。」

「キャ――――――！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

（ぬぁぁぁぁ　寝れないよぅ……ｚｚｚｚ）

「・・・毎年毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きゃぁぁぁぁぁっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして！」

（ビクッ・・・・ｚｚｚｚｚ）

「で。挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――――――」

パアンッ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「で……」

カツカツカツ

（ん？　なんか近づいてくる。　まぁいいやＺＺＺＺＺ）

ガスンッ！

「おい起きろ。いつまで寝ている」

「い〝だぁっ！？　何！？何が起きたの！？　頭痛い！？」キョロキョロ

なぜかみんながこっちを見てくる。

「何が起きたの」

「おい、自己紹介しろ。」

「えっ　無視？　　まぁいいけど」

レイヴンは立ち、

「どうもーはじめまして。　レイヴンといいまーす。　名前については気にしないでくださーい。
趣味は、読書で、好きなことは寝ることですー。
ＩＳについては初心者なのでこれからもよろしくおねがいしまーす。」

「語尾を伸ばすな」

ガスン

「痛い……」グスン

キーンコーンカーンコーン

「さあ、ＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。
　その後は実修だが、基本動作は、半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事しろ。よくなくても返事しろ、私の言葉には返事をしろ」

（うぁ　暴君じゃん。すげぇなぁ。　　もう無理眠い…………）

「席に着け、馬鹿者。　そこは寝ようとするな。」

（えぇっ　なぜばれたし。）

そしてＳＨＲは、終わった。

（ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ）

第5話（後書き）

ほんとにすいません。
駄文にものすごいなったと思います。
いろいろごめんなさい。
今週から、だんだん更新速度が遅くなっていくと思います。
すいません。

第6話（前書き）

すいません少し遅れてしまいました。
勉強などがあって、時間がありませんでした。
あとまた駄文です。よろしくお願いします。

第6話

ＩＳ学園教室

―レイヴンｓｉｄｅ―

一時間目のＩＳ基礎理論授業（さすがに授業のときは起きた）が終わって今は休み時間。

（あ～きついよぅ　なんか視線がすごい。　ってか他のクラスの人とかめっちゃ来てるし。）

そして雰囲気がすごい『あなた話しかけなさいよ』とか『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』　的な感じですごい混(カ)沌(オス)になっていると織斑一夏がこっちに来て

「初めまして。　織斑一夏です。」

「ああ　俺はレイヴンだ。　男は俺らだけなんだ別に敬語じゃなくてもいいよ。」

「わかった。　俺のことは、一夏って呼んでくれ」

「ん　俺のことは好きに読んでもらって構わない。」

「じゃあ、これからレイヴンって呼ばせてもらうよ。」

「んじゃあこれからよろしく頼む、一夏」

「こちらこそよろしく頼む」

「……ちょっといいか」

「ん？　なんだ？」　「……箒？」

「一夏に用か？」

「はい、ちょっと一夏に。」

「別に行ってきてもいいぞ。一夏、俺のことは気にしないでいいから行ってこい。
あと篠ノ之さん敬語じゃなくてもいいから。」

「わかった、行くぞ一夏」

「お、おう」

（よし！寝るか！　視線がすごいし、もう耐えられない・・・・ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ）

ＩＳについての授業中

「？？？？？？？？？？であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ？？？？？？？？？？」

山田先生が、教科書を読んでいる。

一応、レイヴンは、徹夜で参考書は読んでなんとなく覚えているから大丈夫だが

（一夏、何キョロキョロしたり、頭抱えてんだよ。）

（あ、山田先生に分からないことがあったら訊いてねって言われて

る。）

「先生！！」

「はい、織斑くん！！」

「ほとんど全部わかりません！」

（うぉっ　すげぇ、一夏まじすげぇよ）

「え……ぜ、全部、ですか……？」

（山田先生がすごい困っているよ。どうする一夏）

「え、えっと織斑以外で、今の段階わからないって人はどれくらいいますか？」

俺は手を挙げない。

一夏が絶望したような目で見てくる。ものすごい見てくる。

「レイヴンくんは、大丈夫ですか？」

一夏がまだ見てくる。

「はい、一通り読んみましたから。（ドヤッ」

さらに一夏が絶望したようだ。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の隅で控えていた織斑先生が訊いてくる。

「古い電話帳と間違えて捨てました。」

（すげぇまじすげぇよ一夏）

パアンッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「レイヴン、こいつに参考書を貸してやれ」

「はい、そのつもりです。」

「織斑、一週間で覚えろ、いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」ギロッ

（こわっなにあれこわっ）

「……はい。やります」

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥か凌ぐ。
そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。
理解できなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。
」

一夏が一瞬いやそうな顔をした。

（おっ　望んできたわけじゃない的な顔しとるし。　まぁ、わかる

けど。）

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけじゃない』なんて思っているな？」

一夏が驚いた表情をする。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。
それすら放棄するなら、まず人であること辞めることだな」

（せんせー　もうここにほとんど人じゃないのがいるけどどうすればいいですかー？）

「……」

このあと特に何もなく授業が再開した、強いて言うなら山田先生がこけたくらいであった。

ちなみにレイヴンは考え事の最中、ものすごい頑張ってポーカーフェイスをしていたため織斑先生には気づかれなかった。

第6話（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
ついでに言うなら、
自分は中3ですので受験やらなんやらの面倒事が多くなってきました
なので更新速度がだんだん遅くなったりすると思います。
ほんとにすみません。
これからもよろしくお願いします。

第7話（前書き）

7話投稿です。
駄文です。

第7話

ＩＳ学園教室

―レイヴンｓｉｄｅ―

「ちょっと、よろしくて？」

二時間目の休み時間、俺が一夏と話しているといきなり声をかけられた。

「へ？」　「なんだ」

話しかけてきたのは金髪ドリルだった。

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

（なんだ、こいつうるさいな）

「すまんな。お前のことなんてなんも知らん。」

一夏が軽くイラついてるし、

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「「『あ』？」」

「あなたっ、本気でおっしゃいますの！？」

はぁ説明してやるか。

「国の代表の候補の人だ。　読めばわかるだろう。」

「そういわれればそうだ。」

「そう！エリートなのですわ。」

あっ、復活した。復活はやいなぁさすが代表候補生（笑）

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのです。その現実をもう少しりかいしていただける？」

「そっか、それはラッキーだ」

「まあいい、消えろ　興味もない。」

「……馬鹿にしてますの？」

「はい、そのつもりです。」

「大体、あなたたちＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学

園に入れましたわね。男でＩＳを使えると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されてもこまるんだが」

「そーだそーだ。」

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなた方のような人間にも優しく教えてあげますわ」

これが優しさというものか、初めて知ったよ。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まぁ、泣いて頼まれたら考えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？　ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ。」

「あれ？　俺も俺も倒したぞ教官。」

「は……？」

「あ、一夏お前も倒したんだ。」

「レイヴンもか？」

まだ名前が首輪付きのときのこと思い出す。
なんか織斑先生が来て、入試をしてもらう的なこと言ってきて、誰だか分らなかったけど、戦った。
ちなみにアセンは、グレディッツィアでガトリングとバズーカを連射しまくった。

「マッハでハチの巣にしてやったぜ。」

「わ、わたくしだけだと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「そーなんじゃね？　なんかありえそうだし。」

ビシッ。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「俺らはとりあいず倒したぞ。」

「あなた達！あなた達も教官を倒したって言うの！」

「うん、まあ。　たぶん」

「さっきから言ってるじゃん倒したって。」

「たぶん！？　たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ？？？？？？」

キーンコーンカーンコーン。

「っ……！またあとできますわ！逃げないことね！よくって！」

「あとで来なくてもいいぞー。　むしろ来るなよー。よくないからなー。」

1、2時間目と違って山田先生ではなく、織斑先生が教壇に立っている。
何か大事なことでもあるのか山田先生まで、ノートを持っている。

「それではこの時間には実践で使用する各種装備の特性について説明するが、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておく。」

「クラス代表とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。
ちなみにクラス代表戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「はいっ。　織斑くんを推薦します！」

（一夏、面倒事押し付けられてるし）

「私は、レイヴンさんを推薦します！」

（はっ？　俺？）

「候補者は織斑一夏とレイヴンか……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「「お、俺！？」」

「俺はそんなのやるつもりないぞ！」

「俺もだ！」

織斑先生に睨まれた。

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。」

「い、いやでも？？？？？？」

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

まだ反論を続けようした一夏を、突然甲高い声が遮った。
セシリアが文句を言い続ける。

「そのような選出は認めません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！
わたくし、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

（よし！金髪ドリル！そのまま仕事引き受けろ！俺から注意を逸らすんだ！）コソコソ

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　私はこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

（あと少しだ！金髪ドリル！もう少しで俺は楽になれる！）コソコソ

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で？？？？？？」

カチン

（ん？　どうしたんだろう？一夏）コソコソ

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

（一夏ァァァァァァァァ！！何やってんだよ！）コソコソ

「なっ……！？」

（やっちゃったよ、一夏君。　きみはもう少しで仕事無くなったのに。俺はまだ大丈夫だがな！）コソコソ

「あっ、あっ、あなたねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

（よしよしよしよしよしよしよし！）コソコソ

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

（よっしゃ！きたぁぁぁぁぁ！　　これで俺は大丈夫な筈、みんな一夏と金髪ドリルに意識が言行ってるし！）

でレイヴンがこそこそしてる間にハンデやら、やめときなよとかの話は進み、

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで2回行う。」

「織斑先生。」

「なんだ？」

「何で2回なんですか？」

「後ろでこそこそしているやつを見ろ」

（コソコソコソコソコソコソ　オレハジユウダー　イエーイ）コソコソ

「「あっ」」

（……ん？　なんかおかしいぞ。）コソコソ

「レイヴン、お前も試合だ。」

「えっ！？　ま、待ってくださいよ！　みんな忘れてたじゃないですか！俺のこと！」

「お前も、推薦されていたからな。」

「なぜだァァァァ！」

「うるさい」

ガスンと出席簿が飛んで当たった。

「痛い。」

「そういうわけだ。織斑とオルコット、レイヴンは用意をしておくように。それでは授業を始める。」

（あと少しだったのに……あと少しだったのに……）

そのまま授業は進んでいった。

第7話（後書き）

次また遅くなるとおもいます。
すいません。

お知らせ

テストがすこし近くなってきたので、少しの間更新を止めます。

いろいろとすいません。

ただでさえ駄文なのに。

ほんとにすいませんでした。

次は、１１月３０日以降に更新します。

重ねて言いますが、ほんとうにすいませんでした

あと時数稼ぎです

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ

お知らせ（後書き）

本当にすいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4031y/

首輪付きが学園入り

2011年11月20日08時57分発行